

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

〔能楽〕研究展望(昭和53・54年)

著者	西野 春雄
雑誌名	能楽研究 : 能楽研究所紀要
巻	5
ページ	105-122
発行年	1980-11-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020290

研究展望（昭和53・54年）

西野 春雄

はじめに

この二年間に公刊・発表された能・狂言関係の図書・論文等を通観するとき、大きく四つの傾向が指摘できるように思われる。一つは、ここ数年の傾向でもあるが、『日本庶民文化資料集成 3 能』や『驚流狂言』『延宝・忠政本』など各種資料があいついで翻刻紹介され、また『謡曲二百五十番集索引』が刊行されるなど、研究の基礎となる仕事が多く進捗したことであり、二つには黒田正男著『世阿弥能楽論の研究』、香西精著『世子参究』、表章著『能楽史新考(一)』など、学問の何たるかを示す論文集の公刊が続いたことである。こうした能楽資料や好著・大著の続刊は、研究史に残る慶事であろう。三つには、能や狂言の作品研究で素材や表現面での深い追究があったこと、能楽史研究の未開の分野を開拓した重厚な論文や、能・狂言の成立史・演出史に関する試論が見られ、狂言でもようやく脚本構造論が試みられたことである。四つめに、写真・図版を中心とした図録類の続刊と名著の復刻があいついだこともあげられよう。図録のなかには、近年の出版界の風潮そのままに「図書の家具化」（重量があり、高価で、装飾性に富む図書）を象徴するものもあったが、この傾向はもっと強

まるかもしれない。

こうした図録を主体とする出版物は、その視覚性の豊かさゆえに舞台芸能の手引に向いているようで、平凡社カラー新書の増田正造著『能百番』も舞台写真が魅力の一つとなっているが、54年冬には『別冊 太陽』（日本のこころ25、二三〇〇円）が能を特集し話題を呼んだ。表章氏の構成で、原寸大の「世阿弥筆金春禅竹宛書状〔佐渡状〕」「小鼓打ち宮増弥左衛門画像」「鳥養宗晰筆小謡色紙」（いずれもカラー）の特別付録をはじめ、能楽史上の代表的な資料はもちろん、これまで紹介されることの少なかった江戸期の能楽資料も豊富で、絶好の能楽図史でもある。羽田昶氏「能の作劇法と演技」、表章氏「能の歴史」、片桐登氏「江戸の庶民生活と能」、田口和夫氏「日本のコメディ」、西野「世阿弥・幽玄の思想」、伊藤正義氏「能と古典文学」、渡辺守章氏「能とヨーロッパ演劇の出会い」、観世寿夫氏「能面、その内なるドラマ」、荻原達子氏「能装束の美」など、諸家の文章も今日の研究水準を示す好論が多く、とくに「松風」の舞台写真を背景に展開される横道萬里雄氏の文章は、能の特質と技法を（様式の変遷・演者と観客・縦深の舞台・台本と言葉・歩行の芸術・充実と安定・仮面と演技・リズムの構造・象徴ということ・約束ごとについて）の十

項目に分けて新しい視座から説き進める。能の演技を象徴とらえる従来の説に対し、むしろ集約[○]というべきだとの指摘をはじめ、随所に卓れた知見の光る横道氏の文章は、短いながらも啓蒙書にもまさる珠玉の文章と言えよう。今後の能の研究も鑑賞も、この地平から再出発することが望まれ、その意味からも、『別冊太陽』の「能」特集号の持つ意味は大きいと思う。

ところで、研究界は偉大な先達を次々に失った。54年1月12日には、世阿弥や能に関する卓越した論考を発表し続けて能楽研究を大きく進展させた香西精氏(76歳)を、同年4月16日には、世阿弥研究草創期のパイオニアであり、戦後の能界の新しい運動の理論的指導者でもあった西尾実氏(89歳)を失い、同じく4月27日には、ドイツ文学・演劇研究家の新関良三氏(89歳)を失った。53年に野村万歳・観世寿夫、54年に梅若六郎・丸岡大二の諸氏を失った能界ともども、研究界も転換期を迎えたことを思わずにはいられない。先達の築きあげた偉大な業績を仰ぎ見るにつけ、「着実にして的確な実証、能に関する深い造詣と幅広い識見、非凡な直観の冴え、それを支える鋭い言語感覚と、優れて豊かな文学的感性」を兼ね、「徹底的な本文の読み込みの深さと鋭さ」を貫いた香西学を、研究の指標としていきたいと思う。その意味で、伊藤正義氏が『世子参究』に寄せた「香西精氏の人と学問」は肝に銘ずべき一文であった。

以下、この二年間に発表された単行本・論考の紹介を主としながら、研究界の動向を展望してみたい。見聞の狭さから、文字とおり管見にすぎないであろうことを、あらかじめお断りしたい。

〔53年単行本〕(刊行順)

『未刊謡曲集二十九・三十』(田中允編。古典文庫 新書版二五二頁・二三八頁、会員頒布。53年1月・9月)

旧仙台藩主伊達家蔵「伊達本番外謡曲」五百六番のうち未刊曲五百五番の翻刻で、二十九集は「杖橋」から「盤若櫃」までの七十二番、三十集は「蟾が谷」から「名所忠度」までの七十番を収める。解題つき。諸名寄にも見えない近世の戯作が多いが、近世における謡曲の諸相をうかがうことができる。なお、伊達本は三十一集で完結の由で、同巻に詳細な解題が予定されている。

『佐渡の能謡』(後藤政治・椎野広吉編著。佐渡能楽研究会 53年2月、A5版三八八頁、非売品)

昭和25年に刊行された椎野広吉著『佐渡の能謡』(仲野書店)の増補版である。三百年の歴史をもつといわれる佐渡の能楽について、主として昭和15年から43年までの間に収集した資料、あるいは書き綴った記述をもとに、第一部(世阿弥)・第二部(大久保長安から近代まで)・第三部(諸家系譜)に分けてまとめている。佐渡の能謡の姿を知る好資料であり、種々珍しい資料もある。私意を加えず、そのままに引用しているのも有難い。

『狂言のすすめ』(玉川選書(山本東次郎著。玉川大学出版部 53年2月、B6版二〇七頁、八五〇円)

狂言のなかに「人間のあり方」の本質を見つめる著者の独特な狂言論。Ⅰ狂言の正体、Ⅱ狂言とその真意、Ⅲ大蔵流の主張、の三部から成る。狂言に対する真摯な姿勢、対象への確かな観察、わかりやすい文章、等々、本書の魅力であり、演者の立場からの

作品論にも耳を傾けたい。

『能楽百話』(沼艸雨監修、サンケイ新聞社編。駸々堂 53年3月 B6版二四六頁、一八〇〇円)

副題に「サンケイ観世能の二十五年」とあるように、サンケイ観世能の25周年記念出版。プログラム掲載の一七〇篇をこえる諸家の上演曲に関する随筆を整理したもの。関西における戦後の能楽界の記録としても有益である。明治36年刊、広田花月著『能楽百話』と同題になったのは残念。

『謡曲・狂言集』校注古典叢書(古川久・小林責校注。明治書院

53年4月、B6版三七八頁、九八〇円)

謡曲・狂言とも各曲籍を考慮して選曲し、謡曲14番、狂言13番を収める。本文は各流にわたり、特に狂言で、未公刊の野村又三郎家の台本(棒縛・箕被)を採用した点が一つの特色である。

『能面大鑑』復刻(斎藤香村編。東洋書院 53年4月、全四巻・帙入 九八〇〇円)

大正九年に能楽書院から刊行されたものの60余年ぶりの復刊。写真技術も今日とはだいぶ開きのある大正年間に、三百余面の能面の撮影ができたことにまず驚かされる。震災以前の編集だけに今日では見ることでできない能面や珍しい面もあり、能面の相貌や工作上的の特色を知るに便宜がある。

『法音抄Ⅲ』(表章・西野春雄校訂。わんや書店 B6版二六八頁、53年5月、会員頒布)

能楽資料集成の第八冊。『法音抄』(全五巻)の縮写影印(オフセット印刷)本の第三冊目(本冊で完結)。I・IIに続き第五巻(百萬・清経・野宮・東岸居士・誓願寺の五曲と助縁者名簿)を収める。

印刷不良部分や誤刻部分についての校訂補記があるのは前二冊と同様だが、他に『法音抄』全三冊の注解語句・書名・曲名・人名神仏名・引用和歌・寄進者名の索引と、解説がある。正徳五年本の版式等に基づいて天和・貞享年間の初版本『法音抄』の形態を推定した詳細な解説は、本格的な論文として評価し得るものである。

『日本庶民文化史料集成第三巻能』(芸能史研究会編。三一書房 B5版七七四頁、53年6月、一九〇〇円)

能・謡に関する史資料を、演者と演能・謡文化の展開・謡文化の広がり・街角の芸能の三部に分け、巻頭概説と解題とを付して翻印紹介したものである。ごく一部に稀覯となった既刊の資料もあるが、未刊の資料が大部分で、所収文献名は以下に記す通り。

第一部 演者と演能へ安住行状之大概・薪能番組・享保六年書上・猿楽伝記・由良家囃子伝書

第二部 謡文化の展開へ謡抄・素謡世々之蹟

第三部 謡文化の広がりへ便用謡・乱曲扇拍子・乱曲組盃・乱曲颯々颯箱・俳諧素謡集

第四部 街角の芸能へ仙助座一件留・堀井仙助『辻能』番組・堀井座『天爾波態格』番組

本巻の責任編集者は伊藤正義・表章・中村保雄の三氏。解題・校注の担当は上記三氏に加えて、片桐登・竹本幹夫・西野春雄・堀口康生・味方健の諸氏。

最古の謡曲注釈書たる「謡抄」をはじめ、能楽史研究に有用な「享保六年書上」や「薪能番組」、江戸後期の一人の能役者の動静をとおして近世能楽界の実態をつぶさに知ることのできる「安住

行状之大概」など、充実した資料であり、今後の研究に大きく貢献するであろう。

『謡曲二百五十番集』（野々村戒三編・大谷篤蔵補訂。赤尾照文堂 53年7月、A5版六二三頁、八〇〇〇円）

『謡曲二百五十番集索引』（大谷篤蔵編。赤尾照文堂 53年7月、A5版一四三四頁、二九〇〇〇円）

謡曲は中世の言葉の宝庫といわれる。その扉を開く鍵として索引の製作が各界から望まれていた。これまで、謡曲語彙の検索には佐成謙太郎『謡曲大観』別巻の「謡曲語句総覧」か、やや特殊なものでは蜂谷時順『謡曲辞典』を利用するほかなく、それなりの利点はあるものの、採用語句数は少なく、総合的な索引が切望されていた。本書は大谷篤蔵氏を代表者とする大阪俳文学会の編集で、大谷氏の遺稿を記念して46年に企画された大業がようやく実を結んだもので、永年の渴をいやす労作である。野々村戒三氏編『謡曲三百五十番集』（日本名著全集。昭和3年刊）から曲舞と番外謡を除いた部分を拡大複製した形の本文篇が『謡曲二百五十番集』で、それに基づく索引篇は、各曲の本文を十字前後の詞句に細分し、そこに含まれる固有名詞・数詞・季節語・仏教語・引用語句・謡曲慣用語等を見出し語として採用している。収録語句数約八万。範囲を現行曲に限定している点が惜しまれ、一句の途中に現れる語の多くが洩れているという難はあるものの、今後の謡曲研究に大いに役立つであろう。

『この道絶えずは東京における金剛流のあゆみ』（東京金剛会編刊。53年7月、B6版三八一頁、非売品）

東京金剛会発足四十周年を記念し、坂戸金剛最後の大夫たる金

剛右京を偲び、東京金剛会の歴史を回顧するために編んだもの。

戦前発行の雑誌『能楽』『能楽画報』等所載の右京の談話・文章を編集した「能と私」「金剛の能あれこれ」（一部に坂元雪鳥らの文を含む）、「東京金剛会のあゆみ」（東京金剛会能番組へ寄稿した諸氏の文を編集）、「演能の記録」、「金剛座の能面」（中村保雄）の五章からなる。それぞれの章が金剛流の芸と歴史とを語っているが、特に明治五年以降昭和52年までの演能記録が貴重である。

『佐渡の能舞台』（若井三郎著。新潟日報事業社 53年7月、A5版四二三頁、一八〇〇円）

村々の社に能舞台をもつ佐渡の能について、各部落の長老を尋ねて舞台の変遷や演能の実態・能組等を調査した貴重な記録。島民の生活とのかかわりなどについて多くの資料を引いており、巻末に「佐渡の能楽関係年表」を付す。

『薪能』（文化振興会編。鎌倉観光協会刊。53年9月、B6版二四四頁、二〇〇〇円）

（一）昭和18年5月の復興第一回「薪御能」から昭和53年5月までの薪能の記録、（二）鎌倉薪能往来―神事能回顧二十年―、（三）能の歴史・作者・演技演出・能面狂言面等の解説、の三部から成る。近年、各地で盛んな薪能という名の野外能への案内書でもあり、イラスト入りで手頃な能楽ハンドブックの役目も果たしている。

『室町ごころ中世文学資料集』（岡見正雄博士還暦記念刊行会編。角川書店 53年9月、A5版五九七頁、七八〇〇円）

戦後の中世文学の研究に大きな地歩を占め、後学の指標ともなっている岡見正雄氏の「室町ごころ」（『国語国文』昭26・11）を巻頭に据え、この論考の示唆する方向に沿って多彩かつ有益な未

刊資料を集めた書。能楽関係では、伊藤正義氏校訂の「四卷本風姿花伝」と、北川忠彦・和田克司氏校訂の「寛文五年版狂言記」を収める。前者は、五卷本以前の古態を残し、かつ別系統の異本とされる四卷本風姿花伝諸本のうち、比較的善本と目される生駒本と観世本を対校して翻刻している。五卷本をより善本と断定する表章氏の説を肯定しつつも、なお「五卷本もまた多くの欠陥を保有する本文ではない」とし、生駒・観世両本が、五卷本の誤りを正す点の少なくないことを強調する。後者は、万治版『狂言記』からの抄出本で（曲数11曲）、その編集意図・出版動機も不明なため、これまで看過されがちであったが、近世初期における狂言の芸態や受容史を探る手がかりとなるであろう。このほかにも、謡曲の本説との関係から興味深い片桐洋一氏「古今秘歌集阿古根伝・古今秘伝抄」なども収められている。

『観阿弥の芸流』^{三弥井選書}（北川忠彦著。三弥井書店 53年10月、B6版三〇二頁、一四〇〇円）

第一部・能と狂言、第二部・劇的現在能、第三部・夢幻能、第四部・中世文学と能、から成る。三部までが、従来の世阿弥偏重の能楽史を見直そうと努め、中世文学の「非幽玄性」を重視する著者の史観から捕えた能の形成史であり、四部はそれを中世文学全体の中に位置づけている。「観阿弥・宮増・小次郎」（『文学』昭32年9月）以来、一貫して主張してきた史観に基づく芸流論である。

『魂の呼び声―能物語』（白洲正子著。平凡社 53年10月、A5版二六六頁、一三〇〇円）

小学校上級から中学生を対象とした平凡社名作文庫―古典と民話シリーズの一つ。従来の謡曲口語訳や謡曲物語などちがう新

しい試みが成功しており、過不足なく原文の意を尽くした巧みな文章は、原作のもつ情調やリズム感をみごとに表現している。「井筒」「鶴」など全21曲を収める。絵は松野秀世氏。

『謡曲講座曲別篇・総説篇』（喜多実著。能楽書林 53年10月、54年3月、B6版二〇四頁・二一七頁、一二〇〇円、一三〇〇円）

曲別篇は、「喜多流声の名曲集」（全50巻）に添えられた各曲の謡い方を一冊にまとめたもの。脇能・修羅能・三番目能・四番目能・尾能まで59曲を収める。総説篇は、著者が四十数年力を注いで完成した喜多流昭和謡本の前注・傍注を基本に加筆集約した謡い方講座である。

『中世文学資料と論考』（伊地知鉄男編。笠間書院 53年11月、A5版六六三頁、一三〇〇円）

編者の古稀を祝う記念出版。能楽関係では、八瀧正治氏の論考「世阿弥第一期に於ける表現論的達成点について」と、竹本幹夫・三宅晶子氏の鵜刻解題『矢野一字聞書』を収める。八瀧論文は世阿弥能楽論の頂点を表現論が完成した「至花道」期に見、表現論的観点（新古今時代の和歌あたりから方法論として自覚されて来た、重層的表現）から『風姿花伝』成立の問題等を考察したもの。一方、一噌流系笛伝書『矢野一字聞書』は、戦前に野々村戒三氏が紹介したことがある程度で、なかば埋もれていた資料である。天正頃に活躍した一噌流第二代似斎中村又三郎の芸談等を中心に筆録したもので、室町末期における能の演出の変遷を知る上で興味深く、悪筆難読な資料が読み易い形で提供されたことを喜ぶたい。

『風姿花伝影印三種』（表章・伊藤正義編。和泉書院 53年12月、A5版二七〇頁、二二〇〇円、教科書版一四〇〇円）

①金春本風姿花伝（第一年来稽古条々・奥義云）、②花伝第六花修（世阿弥自筆本）、③花伝第七別紙口伝（宗節本）の三種をほぼ原寸大に影印している。①は宝山寺、②③は観世宗家の所蔵。①③はオフセット印刷。②は写真版。③の影印はこれまでなかったもの。①と③には吉田本ほかの主要伝本との校異を付す。

『日本庶民文化史料集成別巻総合芸能史年表』（芸能史研究会編。三一書房、B5版六九六頁、53年12月、二三〇〇〇円）

先に完結した『日本庶民文化史料集成』全十五巻の別巻で、単独の芸能史年表としては初めての刊行。古代中世篇・近世篇・近代篇の三篇に分たれるが、古代中世篇は『大日本史料』『史料綜覧』を基礎としてその他の史料から補い、出典を明記している。近世篇は『徳川実紀』『続史愚抄』から作成し、近代篇は明治時代に限られてはいるが、芸能の多様化にともない広範囲な史料にあたって作成（出典明記）している。近世篇の資料の片よりを補うものとして『劇場年表』（関根至誠）を附録として収録する。本篇十五巻から編集の都合上省略せざるを得なかった重要史料を、年表という形で補うことをも目的とするという。多くの分野の出来事を包含しているためか、能楽関係の年表としては不備が多い。

〔54年単行本〕（刊行順）

『世阿弥能楽論の研究』（黒田正男著。桜楓社 54年1月、A5版六四一頁、九八〇〇円）

宝山寺蔵の金春本風姿花伝が世阿弥自筆とは認めがたいことを

論証した「金春家本風姿花伝の研究」をはじめ、『花習』の内容推定と応永二十年代初頭における世阿弥の能楽論、「拾玉得花」の「一点付る」の意味とその思想的背景、「世阿弥時代の能と『三国伝記』」など、世阿弥能楽論研究にすぐれた業績を残した著者の遺稿集で、全22篇の論考の内の19篇までが能楽関係の論考である。大学の紀要等に発表された、今では入手しにくい論考が一書にまとまったことが有難く、各論考が示す著者の着眼と、論証方法にも学ぶことが多い。小西甚一氏の「誅」、大塚徳郎氏（宮城教育大学長）の「あとがき」がある。

『景清と蟬丸―古典芸能の人間像』比較思想叢書（田代慶一郎著。国書刊行会 54年1月、B6版二七一頁、二二〇〇円）

比較文学を専攻し、能についてユニークな論考を発表している著者の最初の論文集。比較文学的観点から独自の解釈を示した論考「謡曲『蟬丸』について」、謡曲『景清』について、「英語世界における謡曲―フェノロサからウエイレーまで」等五篇を収める。言語芸術作品として謡曲を読む立場を強調している。

『重要無形民俗文化財 壬生狂言』（多田学者。清文社 54年2月、A5版一七三頁、九八〇円）

京都市中京区壬生寺に伝わる壬生狂言の演目（炮烙割・紅葉狩・大原女・桶取など三十曲）を写真と文（梗概と見どころ）とで紹介し、「暮春のロマン―壬生狂言」と題する概説を付す。まとめた紹介の比較的少ない壬生狂言の好適の案内書。

『黒川能面図譜』（写真・蘭部澄 文・増田正造。東北出版企画 54年2月、B5版一四二頁、一六〇〇〇円）

黒川能をこよなく愛する著者による、黒川の蔵する面のすべて

の初公刊。古面から素人の手になる奉納面まで「一つの団体のもつ面のすべて」一一六点を収める。怪奇かつ大ぶりの「土蜘蛛」の前ジテの面、東南アジア系の仮面を思わせる「土蜘蛛」の後ジテ、左右の眼の色を金と緑にちがえた「小べし見」など、五流の能とは異質な古怪なものが特に眼を引く。

『能百番』上下（増田正造著。平凡社刊 54年4月・5月、新書版各一四四頁、各五五〇円）

平凡社カラー新書の能楽シリーズ第五・六冊目。古典から昭和の新作能まで、総計二二二番を収めた手頃な観能の手引書。作品の要所を適確にとらえ、流麗な文章と美しい写真とが織りなす調べが快い。能の全貌を概観するに便利な書。

『人間国宝』（読売新聞社編刊。B5版二三八頁、54年5月、三〇〇〇円）

重要無形文化財保持者個人指定（いわゆる人間国宝）六十八氏およびその物故者十四氏とを、それぞれ数葉の写真によって紹介したもの。能楽関係者では、近藤乾三・後藤得三・桜間道雄・高橋進・松本謙三・藤田大五郎・安福春雄・柿本豊次・茂山千作の諸氏と、物故者として豊嶋弥左衛門・幸祥光・野村万蔵の諸氏が取り上げられている。「人と作品」の項に人間国宝諸氏の短かい評伝がある。なお、重要無形文化財保持者一覧も付されている。

『心より心に伝ふる花』（観世寿夫著。白水社 54年6月、A5版二七〇頁、二〇〇〇円）

その早逝が惜しまれる著者の随想的論考。「新劇」連載の同題のエッセイ（未完の三篇）を中心に、「花」・能面論・作品論・能の演技・発声・装束など多岐にわたる。常に新たな創造を追求した

著者の、世阿弥の言葉に触発されて真実の表現に迫ろうと努力し続けた、強靱な思索と気魄の書である。関弘子夫人の「執筆当時のことなど」も心うたれる。

『民俗芸能と歌謡の研究』（金井清光著。東京美術 54年6月、A5版七五八頁、一二〇〇〇円）

能・狂言に限らず、芸能の研究はまず芸能の原点に立ちかえって祭りの研究から始めねばならないと主張する著者が、全国各地の祭礼と付随する民俗芸能を探訪し、そこで謡われる歌謡を紹介し、同時にその芸能の実態をできるだけ具体的に記録しようとした力作。序説・芸能の発生と伝承以下、滋賀県守山市の勝部神社火祭り・熊本県菊池市隈府松ばやしなど全部で三十件に上る。芸能・神事に関連して随所で能や狂言にもふれている。

『中世芸能資料集』（後藤淑・西一祥・松田存編著。錦正社 54年6月、A5版二〇六頁）

金春本風姿花伝の翻刻と、謡曲台本（現行観世流、世阿弥自筆本・元和卯月本）、古能台本（多武峰延年、佐陀神社神能など）を資料として収める。解説を付す。大学用教材。世阿弥自筆能本の翻刻に誤校が多いことが惜しまれる。

『能楽全書』総合新訂版（野上豊一郎編修。西野春雄・松本雍解題補注、東京創元社、54年7月）続刊中。全七巻。A5版、各三〇〇〇円）

戦中（旧版）・戦後（新修版）と二次にわたって刊行された『能楽全書』は能の研究と鑑賞をあわせた総合的な能楽講座として名高いが、絶版となって久しく、旧版と新修版とでは収載論文に出入りがあった。その両者を総合した復刊で、新しい研究の発展段階

を踏まえた補注と解題を施し、かつ諸論考を補完する諸表や口絵を付す。第一巻「能の思想と芸術」(三三二頁)、第四巻「能の演出」(10月、三三四頁)、第七巻「能楽の実技」(12月、三三九頁)が刊行されている。

『鎌倉新能』玉川選書(中森晶三著。玉川大学出版部 54年10月、B6版一九六頁、九五〇円)

鎌倉新能の創始以来、力を注いできた著者が、今日に至るまでの舞台裏と苦心談を中心に、各地の学校での公演や各都市での普及活動について、様々の挿話をまじえて綴った記録の書である。

『世子六十以後申楽談儀』複製(静嘉堂稀覯書之部。雄松堂書店刊 54年11月、一九〇〇〇円)

松井簡治博士旧蔵の『申楽談儀』松井本の原装複製。同書は文政八年(一八二五)に書家中村仏庵が柳亭種彦所持本を転写した本で、種彦本『申楽談儀』系の善本である。川瀬一馬氏による解説別冊に、明治41年7月発行の「世子猿楽談儀校註附録」と同年10月発行の「世子六十以後申楽談儀校異并補闕」(吉田東伍校註。いわゆるパンフレット本)が写真で影印されているのが極めて有難い。それは入手不能の貴重本だった。

『観世寿夫 至花の風姿』(鎌仙会編。平凡社刊 54年11月、B5版九八頁、二五〇〇円)

急逝した観世寿夫氏の、舞台主体の写真集。吉越立雄氏他撮影の写真を収め、戸井田道三氏「表現意識を意識する―観世寿夫の能について―」、渡辺守章氏「幽玄ということ―観世寿夫の姿について―」のエッセイを収録。故人の気品ある風姿のよみがえる感のある佳品である。

『能面』(中村保雄編著。写真・牧直視、装幀・田中一光。駸々堂 54年11月 帙入 二六〇〇〇円)

創業九十九周年記念出版。能楽諸家に秘蔵されている名品を集大成し、「翁」(六種)から「狐蛇」まで一八〇点を収め、原寸大寸法による図面掲載・裏面写真の収録等、新しい工夫がされている。中村氏の解説は「本図録によって新しい能面研究が発見することを願」って執筆した由で、従来あまり触れられていなかった「芸能と美術」という視点を導入し、『申楽談儀』から宝生大夫重友の『面論記』、観世寿夫氏のエッセイ「能面、その内なるドラマ」まで、古今の資料を引用しつつ、Ⅰ仮面の歴史、Ⅱ能面の美を説き、能面研究についての今後の方向を、(一)能面の様式形成の問題、(二)作者生存年代についての正しい確認の問題に絞って指摘する。個人では購入不能の価格が難点。

『金七芸談』(小寺金七著。金七芸談刊行会 54年11月、B6版一八九頁、二五〇〇円)

観世流太鼓方小寺金七氏(昭和48年3月没)の芸談集。芸談・囃子雑考・出演記録日記抄・「朝長」観音懺法の記録・小寺家略史の各項に分類されているが、いづれも貴重な証言であり記録である。出演記録は太鼓方として参加上演した能のメモだが、諸流の比較など具体的で有意義だし、また能評としての一面もある。金七夫人利子氏の「金七終焉の記」、金七略年譜を付す。里井陸郎・中村保雄両氏の編集。

『世子参究』(香西精著、表章編。わんや書店 A5版五一八頁、54年11月、六〇〇〇円)

香西精氏の第四論文集。香西氏の没後刊行された本書は、I世

子参究、Ⅱ寸考定期便、Ⅲ日葡抄、Ⅳ閑駄抄、Ⅴ旧稿拾遺、という五部構成を採る。Ⅰは主として雑誌『宝生』に世子参究シリーズとして掲載された論考で、同じ『宝生』に連載の世阿弥私注・世子語抄の両シリーズに続くもの。どの項目を見ても、世阿弥伝書解釈上の重要問題点を採り上げたもので、香西氏の新しい読みと理会は、世阿弥研究に大きな光を与えるものといえよう。著者の、鋭い言語感覚に支えられた、原典に対する読みの深さが見事に結実している「は・わの説」「片仮名と平仮名」「神の御前」「へにへへの」の諸篇、能謡に関する深い理解が発露している「隅田川子方論」「のぶべし」、中世社会の実態把握が根底にある「児姿遊風」の諸論考などいずれも珠玉の論考であろう。日本人の生活史の分野に立ち入った「すわる」「坐断」「下居」「下座」の一連の論考も、壮者をしのぐ探究心の発露した考察であり、敬服させられる。Ⅱ・Ⅳは、能や謡曲や能楽論を対象とするさまざまな考察をハガキ一枚の通信として、本書の編者表章氏宛に毎週一回定期的に送り続けたものを、著者自身の命名分類による三部に分けて収める。著書が病を得て隻眼を失ない、残る一眼の視力も落ち、長い論文を執筆しにくくなったために始められたというが、これら寸考54通、日葡抄一〇六通、閑駄抄8通の計一六八通は、もとより短篇ではあるが、いずれも密度の濃い考察である。なお、Ⅱ・Ⅳの大部分には編者表章氏の補説・注が付されている。Ⅴは既刊三著に洩れた論考12篇(書評6篇も含む)を収める。付録として、香西精略年譜・同著述目録、および伊藤正義氏執筆の「香西精氏の人と学問」があり、長男香西昭夫氏の父を語った文章も味わい深い。書名・人名・曲名索引も付す。

『能楽史新考(一)』(表 章著。わんや書店 54年11月、A5版 五七二頁、七五〇〇円)

著者が、昭和27年10月から37年10月に至る十年間に発表した諸論考をまとめた論文集で、巻頭の「『観世大夫書上』の研究」以下、「元和卯月本考」「天正狂言本」について「うたい(謡)考」「四卷本風姿花伝考」など全25篇を、大むね発表順に収めているが、80頁を越える「『実鑑抄』系伝書と真嶋円庵(秋扇翁)」一篇は新稿である。目次を一覧しても分るように、能・狂言・謡曲・世阿弥能楽論・謡本・伝書など、能楽史に関するさまざまな、そして未開拓の分野についての考察で、著者の能に対する関心の広さと、精力的な研究活動には目を見張るが、それにも増して、一つ一つの論考に見られる、問題の設定とその解決に至る道筋及び結論の見事さには敬服させられる。それは、膨大な史資料に接しながら、手抜きのない精緻な調査に基づいて各資料を正確に評価する、著者の方法によって展開されたものであることはいうまでもあるまい。所収論考の殆どには、本文中に補足や補訂が加えられ(もちろん原形は残すが)、論考の末尾に、長いものは十頁にも及ぶ補説が添えてあって、新出資料などによる自説の補強や、若干の見解の変更について言及している。これは著者の性格にもよううが、発表時から今日に至る研究の進展をうかがい知ることでもできるといふ側面を持っている。曲名・人名・書名の詳細な索引のほかに、付載「世阿弥生誕六百年記念展覧会」出品書目がある。38年以降の諸論考をも一日も早くまとめられるよう希望したい。

『川瀬博士 古稀記念 国語国文学論文集』(記念出版委員会編。雄松堂書店 54年12月、A5版八六八頁、一八〇〇〇円)

能楽研究の上でも優れた業績を残されている川瀬一馬氏の古稀記念論文集。能楽関係では、長年の調査に基づく中村格氏「八帖花伝書の刊本について」、新資料を紹介する田口和夫氏「川瀬博士蔵鷺流『延宝・忠政本』解題」を収める。延宝・忠政本は、米沢藩乱舞衆狂言方だった忠政によって、より多いレパートリーの中から抄出・書写されたと推定され、25曲を収載。全体的には鷺流の特徴をもちつつ天正本の古形につながる、鷺流最古の写本としての価値があるとされる。

『能の素晴しさ 狂言の面白さ』（和久田幸助著。わんや書店 54年12月、B 6版二二頁、一五〇〇円）

近藤乾三と野村万蔵の至芸のとりこになったという著者が、両氏との交友を中心に綴ったエッセイ集。

『Nô et Kyôgen (能と狂言)』二冊（R・シフェール訳。ユネスコ 一九七九年三月、A 5版六一三頁〔上〕・五八四頁〔下〕）

著者はパリ大学東洋言語研究所教授で、謡曲はもちろん『源氏物語』『平家物語』から近代文学におよぶ幅広い研究を進め、訳書も多い。本書は能50曲・狂言40曲をフランス語に訳した労作で、きわめて質の高い翻訳といわれている。春・夏、秋・冬の二分冊。収録曲は次のとおりである。

○高砂 福の神 巴 成上り 羽衣 業平餅 邯鄲 磁石 海人。
絵馬 節分 知章 文荷 千手 鈍太郎 百万 宗論 春日龍
神。竹生島 佐渡狐 忠度 棒縛 熊野 塗師 盛久 泣尼
道成寺。蟻通 唐相撲 俊成忠度 蚊相撲 杜若 因幡堂 鳥
頭 三人片輪 小鍛冶。御裳濯川 鳴神 頼政 通円 草紙洗
小町 水掛簪 小袖曾我 朝比奈 土蜘蛛（以上、春・夏）

○江島 末広がり 生田敦盛 鞆猿 松風 鬼瓦 天鼓 六地藏
安達原。白楽天 鍋八擽 清経 鶏猫 住吉詣 右近左近 花
筐 月見座頭 烏帽子折。道明寺 素袍落 経正 茫々頭 野
宮 金藤左衛門 俊寛 文山賊 一角仙人。和布刈 栗焼 通
盛 千鳥 初雪 濯ぎ川 鉢木 茸大会。鶉祭 鶏簪 兼平
木六駄 葛城 髭櫓 竹雪 枕物狂 葵上（以上、秋・冬）
『ЕЖЕКУ—классическая японская драма (謡曲—日本の古典劇)』（デリュージン訳。一九七九年、A 5版三四四頁）

ロシア語による謡曲の最初の本格的翻訳といわれ、全17曲を収める。巻頭には、能を引用の体系として捉えるアナーリナ氏の論文を置き、導入としている。翻訳曲は、高砂・羽衣・田村・敦盛・清経・野宮・井筒・江口・芭蕉・卒都婆小町・綾鼓・隅田川・善知鳥・葵上・求塚・道成寺・船弁慶。本書については鴻英良氏が「新ロシア語版『謡曲集』」として「鍬仙」278号（55・5）に紹介している。

近年、国の内外からいよいよ注目されている能・狂言だが、フランス語・ロシア語による良書が加えられたことは慶賀すべきことである。今後とも諸外国語に翻訳されていくと思われるが、選曲・底本の決定、ト書の挿入の是非、間狂言の台詞等、種々の問題が根本的に問われねば、すぐれた翻訳を生み出すことはむづかしいであろう。

〔雑誌論文、その他〕（53年・54年）

この二年間にも様々な論考が発表された。中世文学会発行『中世文学』24号の「昭和53年中世文学関係文献目録」や『観照』掲

載の53・54年の能・狂言関係文献目録、『文学・語学』86号の学界展望「中世(演劇)」(中村格氏)等を一読しても、相当の数のにのぼる。前年度から継続の論文もあれば、次年度へ続く論考もあるので、ここでは二年間の研究動向を主題別に追いかけてみることにしたい。

研究の進展を促す資料の発掘・調査は、数年来たゆまず続けられているが、その成果に基づく業績として、謡曲注釈書の研究に有益な論考が生れた。それは伊藤正義氏の「謡抄考上中下」で、『文学』の52年11・12月号と53年1月号に掲載された計42ページに及ぶ論文である。謡曲最古の注釈書「謡抄」について、諸本の調査を基礎に、①成立、②伝本、③本文、④意義にわたり、はじめて総合的に考察した伊藤論文によって、「謡抄」研究は大きく飛躍した。氏は博搜した論本を五種に整理分類し、本文上の特色を、(イ)謡抄の目的が漢字を宛てることにあること、(ロ)注の見出しは仮名書きが原則であること、(ハ)注に基本型と変型のあることなど、12項目にわけて明らかにするなど、綿密に検討し、また史料を駆使して成立の過程を説明している。「謡抄」の謡曲本文研究史上の意義を明らかにした点や、「謡抄」は、それ自体としては中世最末期の学問と文化の一つの姿を、当代の文化人の個々の見識を背景として示すものであり、謡抄の意義はこの点に照明があてられるべきであろう。」との指摘も重要である。こうした研究の上に、著者が校訂した「謡抄」(『日本庶民文化資料集成3能』)があるわけで、同書が初めて翻刻された意義は大きく、今後の活用がのぞまれる。

伊藤氏には「謡曲拾葉抄について―著者とその方法―」(大阪市立大学文学部紀要『人文研究』30国語・国文学、53年10月)もあり、『謡

曲拾葉抄』が利用した文献の確認を基に、当時の文献の実態と文献利用を調査し、(1)謡曲拾葉抄の方法、(2)謡曲拾葉抄の著者と成立について考察する。(2)では拾葉抄とほぼ同時代の注釈書で量的にも匹敵する「了雲注」についても言及しており、その全容の解明が待たれる。このほかに近年、加藤盤斎の『謡増抄』(寛文元年序)の続篇と認められる稿本(六十曲)も発見されており、注釈に関する研究は、ようやく緒についた感が深い。

なお、大井貞恕著『謡曲拾葉抄』(寛保元年忍鉦序)は明治期に数種翻印されているが、このほど国文注釈全書本(国学院大学出版部刊、明治42年)が「日本文学古注釈大成」(日本図書センター刊。A5版八〇四頁、一二〇〇〇円)の一つとして復刻された。ただし誤校の多い旧形のままであり、厳密な校訂本文の刊行が待望される。

謡曲の素材や表現の問題に関し、新たな知見もあった。その第一にあげたいのは、田口和夫氏「葛の袴(住吉の遷宮の能)」難句考「世阿弥」は「素眼」であること(『芸能史研究』67号54年10月)である。世阿弥の『五音』下にのせる「葛の袴」中の従来未詳とされていた難句「セイシツノユウ／＼タルヲアケテハ、キチベウニハレ、テウキノカンノ／＼タルヲクダキテ、ウンテンハンニヲサマル」を見事に解明した論考である。氏は、『袋草紙』の一節を手がかりに、この典拠が『文選』卷十三「月賦」であることを発見し、「清質ノ悠悠タルヲ升ゲテハ、気地表ニ霽レ、澄輝ノ藹藹タルヲ降シテ、雲天半ニ斂マル」と読み下した。しかも作詞者「但眼」なる人物が、歌人・能筆・連歌師の「素眼」であることを推定し、その作詞の意義について考察し、世阿弥によって能の名曲が書かれる前の、

地下文化人による能詞章制作の好個の例とみ、「前代の貴族的教養と、新興の芸能群とをむすぶ最大の力だった」と結論づけている。南北朝期の謡曲作者像を考えるうえで甚だ示唆に富む論考であった。なお、同号には島津忠夫氏の論考「謡曲と万葉集―三山をめぐって―」も掲載されている。同曲が特に中入・後場では『万葉集』から離れ、もっぱら後妻打が中心となる点に注目し、「三山」は伝承や物語などがいくつか組みあわされて創作されたと見る。そうした様々の伝承を含みこんだ形態こそが謡曲作者たちにとっての『万葉集』であることを考察し、『古今集』注釈書の世界から多数の謡曲が作られた事情と軌を一にするものとされている。

物語の伝承から連想されるものに、中世の息吹を伝える一群の語り物があるが、能と語りとの関わりを追究したのが天野文雄氏の「能における語り物の摂取―直接体験者の語りをめぐって―」(『芸能史研究』66号、54年7月)である。能における語り物の摂取の相を跡づけ、一曲の形成過程を究明しようとするもので、対象とすべき語りの種類を「直接体験者の語り」という一類型に絞り、①宿駅の語り(朝長)、②社頭の語り(小林)、③八島語り(撰待・景清)、④平家語り(経盛・藤戸・大原御幸)の「軍語り」と称すべき一群について、摂取の諸相を説明している。同氏「『撰待』考」(『国語と国文学』53年2月)も中世における山伏撰待の考察を中心とした一連の論考で、宮増の能に恩愛譚的傾向が顕著であることを指摘し、その基盤を中世唱導文芸の世界に想定する。

その中世唱導文芸に関連し勸進聖の説話の管理者としての性格や実態などについて長大な論考を発表したのが徳田和夫氏の「勸進聖と社寺縁起―室町期を中心として―」(『国文学研究資料館紀要』4

号、53年6月)である。唱導と経済の両面から勸進聖を定義し、神仏の結縁のために、秘事とすべき社寺の縁起譚と靈験譚を語り、作善の功德を教える等の活動を、史資料を駆使して考察している。能「白髭」の替間「勸進聖」(道者)にも言及し、能「当麻」の素材たる中将姫伝説についても詳細な検討を加えている。

ところで、謡曲の素材に関連し、近年、注目されつつあるのが神道世界における説話であろう。ようやく歟を入れられたばかりの分野だが、たとえば、伊藤正義氏に「九世戸縁起―謡曲「九世戸」の背景―」(奈良女子大学『叙説』54年10月)がある。信光作「九世戸」の本説を『三国伝記』巻六の丹後国九世戸文殊事とする従来の説に対し、その背後にある資料を紹介し翻刻している。天橋立智恩寺蔵「九世戸縁起」一卷(伝徹書記筆)と、新資料である、神宮文庫蔵久邇宮家下賜本神道関係伝書の「神道切紙」の内の「九世戸縁起」がそれで、二資料とも応永期の写本が伝存し、しかもそれらが南北朝以前に成立していたらしいことを確認し、「九世戸」や『三国伝記』の背後にこのような縁起に基づく理解のあったことを明らかにしている。短文ながら同氏「春日龍神」雑記―風夜各参の擁護―(『かんのう』231号、54年7月)も一連の論考で、『金玉要集』の「春日大明神御事」に春日大明神の明恵上人に対する神慮の深さとその謂われを説く話があり、謡曲の背景にこうした神道説話のあることを指摘している。今後の謡曲の素材研究に新たな視点を導入するものと思われる。

なお『かんのう』(大阪能楽観賞会発行)には、素人作者横越元久を追跡した伊藤氏の「『浮舟』雑記―よこを元久のこと―」(227号)ほか、「『自然居士』雑記―舟の起源説―」(232号)、「『蟻通』雑記―和歌の心を道と

して」(233号)など、短いながら謡曲作者や素材を考える上で注目すべき論考が掲載されている。

隔月に特集を組んでいる『観世』の作品研究は、53年は、八島正治氏「弓八幡」(1月)、味方健氏「唐船」(3月)、森正人氏「蟻通遡源」(5月)、徳江元正氏「熊坂」(7・8月)、田口和夫氏「富士太鼓」(9月)、西野春雄「紅葉狩」(11月)の六曲を取りあげた。

このうち田口氏の論考は「富士太鼓」の「かくあるべきと思ひなば、しうこうが手を出し、はらうが涙にても、留むべきものを」の一節を、下掛り系古写本『遊音抄』に「周公か手をいたし、潘良かなみたにてもとむべきものを」とあるに抛りつつ、この一節が『蒙求』を典拠とし、かつ知的操作を加えたものと見る。こうした文章作法から「富士太鼓」の形成にあたっては、相当の知識人の手が加わっていることを示していると推測する。

54年は、堀口康生氏「海士」(2月)、天野文雄氏「隅田川」(3月)、小田幸子氏「草子洗小町」(5月)、伊藤正義氏「芭蕉」(7月)、八島正治氏「砧」(9月)、竹本幹夫氏「龍田」(11月)の六曲。各論考とも作品の素材を中心に据えて、縁起・歌学書・詩文集等を博搜して典拠を考証し、作品の表現・形象面等について考察している。それぞれ興味深く読んだが、なかでも、金春禅鳳が作詞上の参考として『断腸集』なる漢詩のアンソロジーを所持していたこと、同集抜書に「芭蕉」が引く「水に近き楼台は……」の詩句も収められていること等を指摘した伊藤論文、詞章面に細やかな鑑賞を展開し、世阿弥の能の詩的美しさを分析した八島論文も面白かった。

『能楽タイムズ』54年6月号から連載をはじめた堂本正樹氏の

「番外曲水脈」は、氏が二十年ほど前に同誌に掲載した「番外曲巡礼」(庵六代・長柄・雪鬼等)に続く論考である。「本文を読み込むこと、即ち虚心に本読みをすることこそ、能楽批判の第一歩」とし、デウス・エキス・マキーナ型の能、勇辨の能、異類打ち合いの能、ドンデン返し of 能、ペーシェントの能など、氏独特の分類法を駆使して番外曲を見直している。54年12月までの検討曲は「竜戴の能」(武文・常陸帯・大般若・当願暮頭)で、「井筒・野宮の類だけが能だという純粹論は、現代の一能楽趣味ではあっても、学問ではない。この点は何度でも再認識したい」との立場は、謡曲研究に新たな水脈を掘りおこすものと思われる。

作者研究では、『能』研究と評論』8号(月曜会、54年10月)が謎の作者宮増を特集した。竹本幹夫氏「〈作者付〉と宮増をめぐって」、天野文雄氏「酒天童子」考」、石黒吉次郎氏「鞍馬天狗」をめぐって」、小田幸子氏「生贄」と『熊野参』の「源流」の、力のこもった諸論考のほかに、資料として西野春雄が「自家伝抄」諸本のうち祖形に近いと思われる九大本自家伝抄を翻刻している。この特集によって今後の宮増および伝宮増の作品研究に、新しい視角が開けたといえようか。

なお、作者付の研究に田中允氏「『いろは作者註文』の研究」研究・本文篇、校異・補注篇」(『青山語文』8・9号、53年3、54年3月)がある。上野学園日本音楽資料室蔵の「謡作者支」を底本とし、鴻山文庫本や他の能本作者註文系諸本との異同を示し、『いろは作者註文』の本文を確定した論考で、詳しい補注も有益である。

能楽論研究では、世阿弥に関する論があいかわらず多い中で、小田幸子氏「金春安照の能楽論」(『中世文学』23号、54年3月)が

異色の論である。慶長前後の金春大夫安照の能楽論についての論考で、安照の能伝書の概要を示し、所作と心、修行などに関する安照独特の論を紹介し、世阿弥の能楽論との比較を行っている。

眼を歴史的分野に転ずると、能にも狂言にも啓発される論考があった。表章氏「大和猿楽の『長』の性格の変遷(下)」(『能楽研究』4号、53年7月)は、三年間にわたって連載された二百頁に近い長大な論文で、今号をもって完結した。「下」の骨格は第二節「江戸期の『権守』と室町期の『長』」「年預考」の三「権守」と「長」、第三節「権守(長)・年預をめぐる基礎的諸問題」、第四節「座と長(権守)と年預―その性格の変遷―」へ結び、から成る。従来ほとんど無視されていた、しかも能楽史研究の根元的な問題を、はじめて掘りおこした考察であり、その結論は「結び」に簡潔に述べられている。要約すると、Ⅰ室町期の薪猿楽に翁役を専門とする「長」と呼ばれる猿楽がいて、それが「式三番」を担当していたことを指摘し、Ⅱ江戸期の南都両神事で「式三番」を独占的に担当していた権守・年預の職能・実態とその廃絶の経緯を明らかにし、室町期の長らの後身が年預衆であることを論証し、Ⅲ権守・年預をめぐる基礎的な諸問題の考察、猿楽座やその座規の性格の根元的な見直しを踏まえて、楽頭の権守への変質など長をめぐる諸問題について論述し、猿楽本来の芸たる「式三番」を担当した翁グループの直系が年預衆であり、彼らこそが四座の座衆の本流であったが、室町末期にはすでに別系統猿楽出自の役者がそれを勤めるように変貌していたろうことを推測している。前人未踏の分野へ深く分け入り、翁グループに対し分派演能グループを想定

するなど、これまでの能楽史に「コペルニクス的大転換」(香西精氏)をもたらした画期的な論文である。

同号掲載の竹本幹夫氏「天女舞の研究」も力作であった。近江猿楽大王の得意芸と伝える「天女舞」について、主として作品研究(構造・作風)の立場からその古態を推定し、天女舞は「歌舞の菩薩が経をもって登場し相手役と経文を朗誦して仏法讃嘆の舞を舞う、とくに音曲上の興趣に富む作風であったこと、世阿弥はそれをまず女体神能として作書し、次第にその祝言能化をはかるとともに、他方神能化しきれぬ分は特殊な遊舞能として独自の風体を成さしめ、結果的に天女の能の風体がいくつかに分立する素地が形成されたこと」等を説き、大和猿楽に及ぼした影響とその意義を考察し、天女舞の変遷の過程を跡づけ、最後に天女舞が解体されるに至ったこと等を想定している。室町末期成立の各種伝書を駆使して、大胆な推論を展開しつつ、難解な、能の原初形態の解明にとりくんだ積極性は高く評価したい。なお、同氏「シラバヤシ考」(『国文学研究』65号、53年6月)は、不明のことの多い舞事「シラバヤシ」の形態について推考したもので、舞事の変遷過程を考える上で好論文である。

また竹本論文とも深く関連する論考に片岡美智氏「二曲三休人形図」の天女舞について(『観世』53年2月)がある。『人形図』に添えられた花びらが、他は梅の花であるのに対し、天女舞だけが桜であることを指摘し、そこに大和猿楽とは別系統の芸風・芸態が暗示されていること等を説く、興味深い論考であった。

演能記録を中心とした論考では、近世初期における宝生座の実態や活動を追跡する片桐登氏の「宝生座の歴史稿―近世初期の宝生座

を中心に」(『宝生』53年4・54・11月)、新資料を翻刻紹介し、江戸初期の勧進能を考察した古川久氏「寛永年間の勧進能」(『能楽研究』4号)、織豊期の一能役者の活動を追う中村格氏「戦国乱世を生きしのいだ猿楽者たち(承前)―幸五郎次郎正能の場合―」(『観世』53年2月)、主として禁裏での演能記録を精力的に調査し、禁裏ならびに京阪能楽史の解明につとめる前西芳雄氏の「御内々御能ニ付太夫役付帳」(下)―江戸後期禁裏御能―(『芸能史研究』60号、53年1月)、「禁裏能についての一件留―森田柵内の記録から―」(『芸能史研究』67号・54年10月)も特筆したい。

人物考証にも注目すべき論考があった。一つは伊藤正義氏「大和宗恕小伝」(『論集日本文学・日本語』3中世)〔角川書店、53年6月、三四八頁、二七〇〇円〕所収)で、慶長九年正月に百六歳で没したという驚くべき長寿を誇った大和宗恕について、彼が室町末期能楽史上に注目すべき人物であり、かつ広義文学史を鳥瞰する一好素材たることを考察している。もう一つは表章氏「『恵空』伝」補考(『中田祝夫博士退官記念 国語学論集』〔勉誠社、54年2月、九九六頁、一五〇〇〇円〕所収)である。謡曲注釈書『法音抄』や『節用集大全』は多くの著述がある恵空は、中田祝夫氏が発掘した学僧であるが、表氏はその経歴や事績を追究し、中田氏の研究を発展させている。

人物考証とともに能楽諸家の系譜をめぐる考察もあった。関屋俊彦氏「狂言師野村又三郎家系考」(『武庫川女子大学紀要』25集、53年2月)は、史資料に基づき「野村家代々の年譜を考証・統合しよう」としたもので、末尾の慶長三年から明治40年におよぶ野村又三郎年譜も有難い。同氏「『和泉流家系考』補遺附・資料紹介

『狂言由緒略書』(『武庫川国文』13号、53年3月)は前稿を補うものである。ほかに石塚道子氏の「^{高安流}岡治郎右衛門家の系譜と資料」(『金剛』106号、54年9月)は、氏が見出した岡家に伝来する能楽資料群の調査をもとに、岡家の初代から十六代に至る系譜を跡づけた論考で、「高安彦太郎系図」もあわせ紹介している。表章氏「喜多流ツレ日向家小考」上・下(『喜多』53年秋・54年春号)は、これまで不明であった喜多流のツレ日向家^{ひなた}の歴代について、その事績を解明した論考で、江戸期における喜多流内の実態をも明らかにしている。こうした論考によって、野々村戒三著『能楽史話』の諸家の系譜が補訂され、また同書にない能楽諸家の系譜が解明されたことを喜ぶたい。

資料紹介で目にふれたものを列記してみる。伊藤正義氏「能間・作物作法」(『神宮文庫本間狂言資料』〔『文学史研究』19号、54年8月〕は、江戸ごく初期の間狂言資料として貴重であり、種々古色も存する。資料不足がその進展を大きくさまたげていた間狂言の研究に役立つであろう。北野克氏も『能楽評論』に能楽史上の珍しい資料を写真を添えて紹介している。(1)鈴木其一の能画「芦刈」の紹介(27号)、(2)能楽協会記念能慰労会撮影写真(30号)、(3)天保四年九月の「將軍家奥御舞台御能拝見之勤書」草稿(34号)で、今後も、近世および近代能楽史の一コマを形成する資料の紹介をお願いしたい。天野文雄氏の「能大成前夜の一勧進史料」(『能楽タイムズ』54年9月)は、福祥寺の古記録「当山歴代」の応安年内の記載に「同四年^{辛亥}勧進猿楽 観世大夫 上棟四方様也」とあることを紹介し、この観世大夫は当然観阿弥であり、勧進猿楽の記録としても古いとされている。また後藤淑氏が『芸能』に連載中の「芸能史研究

ノート」は、既知資料の新たな読み直し、新資料の紹介などがある。興味深く、たとえば「北陸の猿楽と仮面（上）」（同・54年12月）は寛正六年に幸大夫なる猿楽者が能登・伊夜比咩神社に猿楽を奉納したことを物語る史料を紹介している。天野氏とい後藤氏といい、地方の古い寺社の資料を発掘したもので、今後とも資料の精査が期待される。

また『福智院家古文書』（花園大学福智院家文書研究会編、54年3月）は、南都興福寺の坊官家の史料集であるが、「長祿二年二月九日、大和猿楽金剛大夫起請文」など、能楽史の解明に有益な史料を収録しており、貴重な記録である。

ほかに日本思想大系『古代政治社会思想』（山岸徳平・竹内理三・家永三郎・大曾根章介校注。岩波書店 54年3月、五四六頁、二八〇〇円）に藤原明衡「新猿楽記」が収められた。大曾根章介氏の校注で、能楽史料としても著名な同書の全容が、読みやすい形で公刊されたことは朗報である。

短いながら興味深い論考を掲載する『鉄仙』の〈研究・十二月往来〉は、53・54年は左の論考を載せた。②⑥おもてあきら氏「観世大夫元雅小考―大夫号の意義の変遷―」、②⑦西野春雄「放下僧、古今あり」、②⑧小田幸子氏「散佚曲『一夜天神』について」、②⑨竹本幹夫氏「夢幻能の前場に関する覚え書」、③⑩石塚道子氏「秘蜜録・小考」、③⑪田口和夫氏「木のへ殿の申ぢやう」再考。②⑥は従来その性格がいまいであった大夫号の意義の変遷の解明、②⑦は現行曲とは別な形の「放下僧」の存在を推測させる新資料の発見、②⑧は散佚曲「一夜天神」の形態の推理、②⑨は夢幻能の構造に関する新見、③⑩は狂言伝書「秘蜜録」に関する新資料の発見と紹介、③⑪

は狂言形成期の解明に重要な既知資料の、再検討、とそれぞれ興味深い。

能の音楽に関する研究では、添田建治郎氏「謡曲譜本のある種の施譜法―日本古典全集『帝室謡曲百番』にみる―」（二）（三）（『山口国文』1号、『春日和男教授 語文論叢』、『山口大学文学会誌』29号）が、いわゆる擬光悦本を用いて謡曲の施譜法について考察し、小島英幸氏「室町期謡曲旋律再生法試案」（『観世』53年11月）は、室町期の謡曲に律音階に基づく声明系の旋律を想定し、それを現存本の節付けから再生する方法についての試論である。また岩佐鉄男氏の52頁に及ぶ長文の「能の音楽」（『比較文学研究』35特輯・能の諸相、54年8月）は、「音楽としての能の形成を、先行芸能や周辺芸能との関連―とくに楽器の面での―を通して探り、次に観世父子による能楽大成期の音楽、およびその後の発展・変化を取り上げ」、諸表を駆使して音楽構造を解明しており、本格的な能の音楽論である。

狂言研究では、小山弘志氏「狂言と能」の「間の物」としての観点から」（『比較文学研究』35）に啓発される点が多かった。狂言が能と能との間に挿まれて上演されていた事実に着目し、狂言の能に対するこうした関係を「間の物」と呼ぶ観点からの考察で、①永享四年三月伏見宮家の猿楽のこと、②日記類に見える猿楽の曲名のこと、③狂言を番と数えないこと、④近世初期諸芸能の「間の物」のこと―「間の物」としての狂言―、⑤「間の物」である狂言が能を吸収すること、⑥狂言が能と並ぶこと、の六項から成り、最後に「間の物」である狂言は、能が歌舞劇の性格を濃くして来たのに伴って、科白劇としての成形を遂げ、十六世紀の半ばごろには能

と並ぶ存在になった。ただ、「間の物」という性格は依然として残り、能と能との間に挿まれて現在に至っている。そして、能に並ぶ存在となったからこそ、「科白劇」狂言は、巨視的に見て、歌舞伎にも引き継がれたのであろう。⁶と結んでいる。「狂言は、能よりも歌舞伎に近いというべきであらう」とする発言など、狂言の劇的形態や根本的性格を考える際の大事な視点となろう。

狂言の成立とその展開を追求する論考も目についた。佐藤道子氏「呪術から芸能へ——能と狂言の母胎——」(『国文学』53年6月、特集「能と狂言の世界」、田口和夫氏「狂言、劇的性格の変貌」(同上)、橋本朝生氏「狂言の成立」(『日本文学』53年7月)などで、猿楽との関りのなかで無視できない呪師の存在を、宗教的呪術者と呪的演技者として寺社の行事や芸能の流れのなかに位置させようとした佐藤論文、狂言の時代相を一つの流れとして把握、成立期の狂言が中世末・近世初頭の歴史のなかでどのような性格の変貌を遂げ今日に至ったかを論述した田口論文、能・狂言同根説をさらに進め、能と狂言の分化の過程を追究しつつ成立の様相を推測した橋本論文、いずれも示唆深い。橋本氏「天正本狂言の時代——『天正狂言本』と『閑吟集』——」(『文学・語学』80・81合併号、53年3月)は、天正本狂言の小歌と閑吟集歌謡との関係を一曲ごとに検討し、天正本狂言の時代を大永四年以後それをあまり下らない頃と推定している。山伏こそ中世的な存在であったとし、山伏狂言の多様性とその変容を通時的に検討しようとする杉森美代子氏「山伏狂言考序説」(帝京大学『文学部紀要』11号、54年10月)もある。

狂言台本の研究では、田口和夫氏が鷲流の現存最古と目される『延宝・忠政本』を翻刻紹介したことを特筆したい。田口氏もい

われるように、この翻刻を用いての、狂言史にかかわる論考の多く出現することが期待される。

羽田昶氏「狂言の脚本構造——小段分析の試み——」(『芸能の科学』9 芸能論考Ⅳ、53年3月)も興味深い。狂言における筋立ての類型性を脚本構造論として把握し、せりふの小段・謡の小段・囃子事の小段・終曲の小段に分類し、さらに細分類して論を進める。せりふの小段で、二人の人物が一緒にセリフをいう「重白」を立て終曲では「留め」と「込み」を分けるなど、新見も少なくない。

研究的な講演会や能楽講座も各地で意欲的におこなわれたこともこの兩年の一つの傾向であらう。関西では、大阪能楽観賞会が53年9月から10月にかけて公演二百回を記念して先行文学との関係について能楽教養講座を開講した。題目と講師は、和歌と能(島津忠夫氏)、伊勢物語と能(堀口康生氏)、源氏物語と能(玉上琢弥氏)、平家物語と能(山下宏明氏)、説話と能(北川忠彦氏)、文学としての能(伊藤正義氏)。また54年度も「能の魅力」と題して左の題目と講師によって開かれた。能の歴史(伊藤正義氏)、能の面(中村保雄氏)、能の音楽(増田正造氏)、能の装束(切畑健氏)、能と文学(北川忠彦氏)、能と狂言(小山弘志氏)。

東京では、能楽懇談会主催による第4・5回公開能楽講座が開かれた。53年は12月に「井筒」をめぐる講演(横道萬里雄氏・観世栄夫氏)と演能(観世静夫氏ほか)を、54年は12月に「能の翁と三番叟——式三番——」(横道萬里雄氏、浅見真州・金井章氏ほか)を催し、とくに「翁」をめぐる講演と演技は、横道氏の分析によって複雑な「式三番」の構造が手にとるようにわかり、有意義であった(当日配布したプリントも貴重)。

一方、昭和39年4月に発足し「広く芸能ならびにその歴史に関する諸問題の学問的研究」を推進してきた芸能史研究会が創立十周年を迎え、『芸能史研究』61号(53・4)をその記念号とし、林屋辰三郎氏「日本芸能の数寄性―芸能史研究会創立二十五周年を迎えて―」、「芸能史研究事始―例会報告の記録―」、「資料・芸能史研究会の仕事」等を掲載している。『芸能史研究』総目録が載っているのも有難い。それまで孤立分散していた芸能の研究に共通の場を用意したことの意味は大きく、今後の一層の活動が注目される。

なお研究書の復刊も眼についた。歴史研究では河竹繁俊著『日本演劇全史』(岩波書店、54年2月、九八〇〇円)と能勢朝次著『能楽源流考』(岩波書店、54年10月、一二〇〇〇円)であり、能面関係では前掲『能面大鑑』の復刻、質の高い啓蒙講座の野上豊

一郎編修『能楽全書』(全七巻。刊行中)の復刊などである。河竹氏の著書以外は、いずれも戦前の刊行である。今日もなお生命を失っていないことを物語っていよう。

最後に、例によって53・54年中に刊行された古記録類で、能楽史研究に役立つと思われるものを刊行順に列挙しておこう。

〔53年〕

『妙法院史料第三卷』堯怒法親王日記三
堯怒法親王別記他 吉川弘文館 3月
史料纂集『言国卿記第六』自明応七年正月
至同年十二月 続群書類従完成会 11月

〔54年〕

『妙法院史料第四卷』堯恭法親王日記
真仁法親王日記 吉川弘文館 2月
史料纂集『舜旧記第四』自慶長十八年正月
至元和二年三月 続群書類従完成会 9月